

家庭小説の消長

——『大阪毎日新聞』の明治——

一、「圏外」の文学

家庭小説というジャンルがある。一九〇〇年前後に文学の理念を実践するものとしてではやされたが、文学の芸術化と男性ジェンダー化によって排除され、やがて大正期以降、通俗小説や大衆小説へ延引していったとされるジャンルである。『明治文学全集』93 明治家庭小説の瀬沼茂樹の解説を参照すれば、村井絃齋の「日の出島」、「食道楽」を濫觴として、徳富蘆花「不如帰」、尾崎紅葉「金色夜叉」、菊池幽芳「己が罪」や「乳姉妹」、中村春雨「無花果」、田口掬汀「女夫波」、草村北星「相思怨」、「濱子」、柳川春葉「やどり木」、「生さぬ仲」、大倉桃郎「琵琶歌」などが挙げられている。⁽¹⁾ 他の研究者においても、家庭小説といえば、ほぼ同様の作品が挙げられることだろう。

瀬沼によれば、家庭小説は文壇の「圏外」で形成されたジャンルであるという。この指摘はおそらく妥当なものだ。飯田祐子が跡づけたように、まず最初、家庭小説は文学批評のうえで、ある種の理念として提示された。⁽²⁾ 理念としての家庭小説には、文学を倫理的に武装することで、文学が継承していた前近代的ないががわしさを排除する意図があったと考えられる。それを実作へ移行したのは主に出版、ジャーナリズムと結びついていた作家たちだった。家庭小説の試みは、ある一定の度合いまで一般読者の文学への認識を改める結果になっただろう。だが、明治三〇年代後半、芸術を至上価値とする文学概念の確立とともに、文学は作家主義、個人主

諸岡知徳

義、男性ジェンダー化へ傾斜しはじめる。その結果、道徳的な意味合いの強さによって女性ジェンダー化された一般の読者に受容されていた家庭小説は、排除の対象となり、文壇圏外に追い出されることになる。以上が家庭小説と文学をめぐる簡単な見取り図であろう。

文壇の「圏外」ということばには二重の意味があるといえる。一つは、いわゆる近代日本文学史の「圏外」という意味である。近代の日本文学史をたどるとき、そこに作品群としての家庭小説が占める場所はほとんどない。もしあっても、わずかに紅葉、蘆花の名が挙げられる程度だろう。それらの作品は芸術作品の歴史のなかに存在することを認められず、通俗小説、大衆小説の祖先としての位置づけがなされるのみである。だが、そうした文学史記述の問題は、ある種のイデオロギーの問題である。文学の芸術性への志向が、通俗小説、大衆小説との二分化を推進したことはいうまでもない。芸術至上主義的な文学概念が確立されるまでの揺籃期には、文学の芸術化、芸術を至上の価値とする文学という理念は、カウンター・カルチャーとしての意味を前面に打ち出すことができただろう。しかし、文学の芸術化が認知されると、文学はハイカルチャーとして権力性を前景化させることになる。ハイカルチャーとしての文学は通俗小説、大衆小説を排除し、自己のアイデンティティを確定する。まさに、家庭小説はそうした地点から週及的に文学の「圏外」へと追いやられたジャンルであったのだ。⁽³⁾

もう一つは、文壇＝東京の「圏外」という意味である。一九〇〇年代、大きな規模での出版事業は東京と関西の二点を中心に行われていた。特に創作という点で

は、東京での戯作文化の影響が読書をモード化し、物語の作り手たちを簇生させる環境を準備したといえる。一方、関西では出版業は盛んながら、けっして優れた作家が活躍していたとはいえない状況だった。『読売新聞』を追い出され、一八九八(明治三一)年に神戸に移住した江見水蔭は、関西移住を「流行作家没落」の末路という。⁴⁾このことばには文壇＝東京の「圏外」へはじきだされた作家の自嘲がある。だが、その水蔭を神戸では一流作家として仰視していたという。⁵⁾「没落」という水蔭の自己評価と関西での扱いの違いはそのまま創作者の水準と通じているだろう。

家庭小説を代表する菊池幽芳はこの時期の関西での文学状況を「文学雑誌の長く成立するを許さず」、「浪華文壇はこれを極言する時は混沌たる暗黒界にして只暗中の産物として僅かに朝日毎日両新聞に顕る、小説如きに満足せざる可からず」という。⁶⁾わずかながら、『大阪朝日』、『大阪毎日』が文学作品を掲載していただけというわけである。文学不毛の土地という大阪のイメージは関西全体を覆っていく。そうした文学不毛の地において、そうした状況を打破しようと創作された文学作品群が家庭小説なのであった。

二重の「圏外」に位置する家庭小説は、はたしてどのように出発し、展開していったのか。その出発については多くの論者の関心を集めるところだが、その展開過程を論じるものは案外少ない。本稿では、家庭小説の歩みに注目していきたいと思う。

二、講談の近代

菊池幽芳の家庭小説観を語るとき、必ずといっていいほど引用されるのは、単行本『乳姉妹』の「はしがき」である。⁷⁾

全体私は私共の新聞に講談の載る事をだん／＼廃したいといふ考で、それには何か之に代る適当なものを見つけた。今の一般の小説よりは最少し通俗に、最少し気取らない、そして趣味のある上品なものを載せて見たい。一家団欒のむしろの中で読れて、誰にも解し易く、家庭の和楽に資し、趣味を助長し得る

やうなものを作つて見たいものであると考へて居ました。

ここで述べられている、一家団欒、家庭の和楽、趣味の助長などの言辭は、家庭小説を論じる際の常套句であるともいえる。飯田祐子はここに家庭小説の特殊化を看取する。飯田が注目したのは、「最少し通俗に」という部分であった。講談と家庭小説とが並列されることが家庭小説の通俗化への通路を開くことにつながったという。飯田は「講談＝家庭小説＝通俗／一般の小説」という図式を示す。ただ、この図式は単純化されすぎているのではないだろうか。川崎賢子によれば、この時期の「通俗」の概念には揺れがあったという。⁸⁾「明治三〇年代初頭の段階では「通俗」について、感化・教化・啓蒙のために有効な方法として、それをむしろ肯定する言説も完全に消滅してはいない」と川崎はいう。幽芳も「俗受といふのは広く読まれる事で俗受は亦文学に欠くべからざる條件だらうと思います」と発言している。⁹⁾そうした概念の揺れは図式のなから欠落してしまうのである。

幽芳は明らかに講談の位置を低く見ていた。一八九九(明治三二)年五月六日から一〇日まで連載された「文学的趣味」¹⁰⁾という記事には「浮華淫靡に傾ける今日の小説、或は講談等」(五月七日)、「無意義なる講談もの」(五月九日)といった表現がある。加えて、幽芳の『乳姉妹』の「はしがき」での家庭小説の評価を反転させれば、講談は趣味のない下品なもの、家庭小説は一般の小説よりはやや通俗だが、講談よりは優位にある、と考えられていることがわかるだろう。

幽芳の文学観は西欧文学、特に英米文学を基準としている。幽芳の新聞小説家としての出発は、渡辺台水との共訳「光子の秘密」¹¹⁾であった。それ以降にも「新聞売子」、「国事探偵」、「深山雪枝」、「七日間」など、多くの翻案を手がけている。¹²⁾その他の創作にあたって西欧の小説を読みあさったと自らも記している。特に「乳姉妹」がヴァサ・エム・クレイの「ドラ・ソオン」の翻案であることは有名だ。また、弟の戸沢正保(貌姑射)を大阪毎日社に客員として迎え、文学欄に英文学に関する記事を連載させてもいる。そうした価値基準からすると、近代以前から続く講談が家庭小説の下位に置かれるのは当然だといえる。しかし、それは一面的な判定でしかないだろう。

一八九七(明治三〇)年五月九日、『大阪毎日新聞』で桃川燕林による最初の講

談速記「四国訃仇討」の掲載が始まる。講談を速記によって活字化するという試みは、その当時には一般的なものだった。一八八九（明治二二）年には東京で『百花園』、大阪で『百千鳥』といった講談速記専門の雑誌が刊行された。その後、『百千鳥』は『ことばの花』と名を変え、一度終刊するものの一八九五年に『新百千鳥』が刊行された。一九〇〇年前後には講談は人気の読みものであったのだ。講談速記は東京で始まったが、大阪毎日は大阪朝日新聞社に先駆けて新聞紙上に講談を採用したのである。『大阪朝日』が講談を掲載するのは一九二〇（大正九）年のことである。

『大阪毎日』での講談の掲載は、繰り返される幽芳らの強い講談否定の主張にもかかわらず、一九二〇年代まで続いた。¹³ 講談の採用は経営面で有益とみなされたのであろう。途中、歴史小説や新講談と競合しながらも、三〇年あまりにわたって読み継がれた講談速記の魅力とは何だったのか。家庭小説という問題を講談速記の側から逆照射してみるとどうなるのだろうか。

一九〇〇年代の『大阪毎日新聞』紙上にもっとも多く名が見える講談師は桃川燕林である。明治以降、燕林には二代、三代、四代がいた。『大毎』でも代々の燕林が活躍している。この時期は燕林をはじめとして桃川派の桃川如燕や桃川小燕林などの名前が多く、一九〇四（明治三七）年から一九〇六年まではほとんど燕林一人の講談速記になっている。一九一〇年代後半からは、一龍斎貞山、真龍斎貞水、錦城斎典山らの典山・貞山系統、小金井蘆洲、放牛舎桃林、悟道軒円玉、猫遊軒伯知らの系統、元四代燕林の阪本富岳、政治講談の伊藤痴遊などの名が見られる。

この時期の講談師は、芸人という特殊な性格をもつ一方で、権力者の近くにも位置していた。一八八四（明治一七）年頃に初代桃川如燕が、一八八六年に二代桃林亭伯円が御前口演を行ったとされる。売れっ子の講談師は華族や実業家らの座敷などに多く出講し、多額の収入を得ていた。たとえば、二度の御前口演を行った初代如燕は、土方久元に厚遇され、その縁で毛利家、黒田家などの華族たち、三井、渋沢、大倉、岩崎などの財産家たちの邸宅に出入りしていたという。¹⁴ こうした権力者たちとの結びつきは講談の強力な後立てとなっていたといえる。

やがて講談の主要なテーマである忠や孝は、近代日本において天皇中心の国家権

力のヘゲモニーに接合することで、近代国家の倫理規範へと更新されていくことになる。封建的な忠孝という徳目は、教育勅語（一八九〇年）を経て、「国民」の道徳となる。藤田省三は「道徳は国民核（Nation's Kern）であり、国民はここで政治的統一としてよりも先ず道徳的統一体である」という。¹⁵ 教育勅語により強調された天皇と「国民」との直接的な結びつきに、忠孝という徳目が導入されることで、近代国家の天皇中心のヒエラルキーが補強される。一八八七年には講談や落語で窃盗や強盗を題材にした演目の上演を禁止されるが、それも国家権力の道徳教育に講談が編成されつつあったことを意味していると考えられよう。

『大阪毎日新聞』に発表された演目を通覧すると、騒動記、武勇伝、仇討もの、人物伝などが多く、軍記物や侠客もの、政談ものなどは比較的に少ない。特に、一九〇〇年から一〇年前後には騒動ものが多く、「徳川天一坊」、「相馬大作」、「慶安太平記」、「越後騒動」、「黒田騒動」、「宇都宮釣天井」、「伊達評定」、「加賀騒動」、「仙石騒動」、「桜田騒動」、「天草騒動」などが散見される。従来から大阪ではお家騒動ものが好まれていたという。¹⁷ 「目出度し」の大団円」の勧善懲悪という図式の明確さと、読者が物語に期待する波乱とが騒動記には約束されているのだといえる。仇討ものではさらに、「法制度を逸脱・侵犯する者たちによって、社会公認のモラルはむしろ典型的に担われてゆく」ことになる。¹⁸ まさに読者を「政治的統一」ではなく、「道徳的統一」へ導くものだといえる。混乱から秩序へという道徳性の回復の物語は、近代国家の道徳理念と一致するものであるはずだ。

平明な口語的な文体、単純明快なテーマ性と道徳性、ダイナミックでドラマティックなストーリー展開、読者との応答など、すでに口承芸能として洗練されていた講談は、新聞の連載読みものとしても多くの読者をひきつける魅力をもっていただろう。一九〇〇年代には講談速記とそれ以外という二本立ての小説掲載のスタイルが『大毎』紙上に定着することになる。幽芳の家庭小説はこうした状況下で主張された。講談の否定は、まずはジャンル間の争いを意味するものだといえる。

三、「家庭」と小説

講談の人氣が高まれば高まるほど、幽芳は家庭小説の新しさと道徳性という優位性を主張せざるをえなかったのであらう。いつてみれば、幽芳には多くの読者を獲得している講談速記に対する対抗意識があったのではない。幽芳の家庭小説の理念は、従来からの東京文壇での議論を踏襲してはいるものの、実作面では講談という当時の『大阪毎日新聞』の新しい新聞読みものに對抗すべく登場させられたものであるようだ。単行本『乳姉妹』の「はしがき」での家庭小説観は講談への対抗意識の延長上に位置すると考えられる。幽芳にとつて講談とは、過去のものではなく、家庭小説というジャンルの敵であつた。それは眼前にある脅威としてとらえられていたともいえる。

そのうえで、幽芳が家庭小説を優位とする根拠は二つある。一つは、近代文学の概念から決定される講談の古さである。坪内逍遙によつて勸善懲惡は前近代の遺物として位置づけられた。逍遙はいう。「作者が岡目の手細工もて人の感情を折衷なし、勸懲といふ人為の模型へ造化の作用をほめくむときには、非人情と世態とは已に天然のものにあらず、作者みづから制作へたる詭向きの人情なれば、其人物を除くの外には決して見がたき人情なるべし」(『小説の主眼』『小説神髓』一八八五年)。人情世態風俗の徹底的な描出を主張した逍遙にとつて、勸善懲惡という物語の型は不自然であり、不必要なものであつた。勸善懲惡を旨とした騒動記や仇討などの、講談の物語の設定は、そうした近代文学の概念から根本的に否定されることになる。講談の古さとは、国家政策上の要請と理想としての近代文学概念との差異の現れなのである。ただ、幽芳の家庭小説観は、その古さを単純に否定しえない地点から発想されている。それがもう一つの優位性の根拠にもつながる。

二点目の根拠とは「家庭」という理念そのものの優位性である。幽芳はこの時期、新聞記者の立場から「家庭」の問題の重要性を認識せざるをえなかったようだ。一八九八(明治三一)年施行の民法において法的な単位として家というものが位置づけられ、家父長制が補強された。同時に、良妻賢母という教えが前景化され

るようになる。幽芳が「家庭の葉」欄を創設するのも一八九七年前後である。

「家庭の葉」欄は家庭、特に女性に対するさまざまな情報を発信していた記事である。内容は料理、子ども、家族の健康管理などの家事に関するもの、化粧などの美容に関するもの、女性の立ち居振る舞い、風俗に関するものなど、多岐にわたっている。そのなかで幽芳は「離縁と新民法」や「家庭に於る父母」という記事も書いている。「離縁と新民法」は一八九八年八月二日から一七日まで五回の連載記事で、いささか「家庭の葉」欄の体裁をこえている。そこに幽芳の強い問題意識があつたと解釈できるだろう。

幽芳の主張はまず、男側からの一方的な離婚という「野蛮的習慣」が一般化していることを問題化する。そして、新民法においては「野蛮的習慣」が法の制限の対象となつたことを説明する。以下、離婚裁判を提起することのできる場合を具に紹介していく。この記事で幽芳は離婚という前近代的な習慣を規制する近代的な民法を評価している。だが同時に、「法律が如何に完備したればとて社会の人心を改善せざる以上は惡徳は種々なる方法に依りて行はれ離婚の如きも一層慘酷なる手段にて行はるゝに至らんも知る可からず」とも述べる。法による制限がさらなる法の抜け道的な悪事につながるかもしれないという法の限界を指摘するのである。そのうえで幽芳は「家庭の教育を改良し婚姻を鄭重にし夫婦の關係を一層健全ならしむるの策を講ずるにあり」という。法の限界を見据えた結果、法を超える道徳を教育する場という役割が家庭に割り振られることになるのである。幽芳の家庭の理想像は「家庭に於る父母」(一八九八年九月七日)に記されている。

「家庭に於る父母」のなかで幽芳は、現今の父母とは「漫然子を挙げたるが故に父母」であり、家庭での教育も「父母たるが故に教育の義務ありと心得るに過ぎず」という状況であり、「真正に児童に対する地位と責任に関しては自ら知らず只空々寂々子を産み子を育つるを以て父母の能事終れりとするもの多きに似たり」と難詰する。父母の家庭での存在意義は、勤勉の必要性、同情の念、道徳の制裁を教え、「一家に秩序ある事より延て社会にも秩序の必要なる事等を知らしめ総て冥々の中に児童が後來人間として世に処するに必要な根本の智識を養はしむるに在り」とする。家庭を社会の最小単位ととらえ、社会の構成員の一員として児童に社

会秩序や道徳を教育する、という家庭教育の主張は、明治中期に繰り返されていた。⁽²⁰⁾ そこから父は家庭を代表し、母は家庭内を調和するという性別役割分業論も現れる。そうした家庭教育の言説を幽芳は小説の啓蒙性に接合する。それが幽芳の家庭小説なのである。

社会における家庭の役割をふまえたうえでの家庭小説は、道徳性の啓蒙という点で、講談と近接する。道徳の教育のため、勧善懲悪という物語の型を踏襲しなければならぬからだ。「講談Ⅱ家庭小説Ⅱ通俗」という図式はここに由来する。だが、幽芳は「家庭」という近代の概念に依拠し、善と悪とを複雑にすることによって、講談との差別化を図ろうとするのである。家や主君という封建的な講談から、新たな近代の「家庭」へという舞台設定の変更が、幽芳の講談に対する優位性の主張につながるといえる。

しかしながら、家庭小説も講談もその目指す地点はそれほど隔たつてはいない。先どつていえば、むしろ同一のベクトルを有している。それは幽芳の次のようなことばからも推測できる。

婚姻の最大目的は人の此世に生れ出たる義務を完うせんがためにして天賦の靈性を發達せしむる国家及社会に尽す可き一の方便なるがために之を行ふなり祖先の血統を絶つまじとするが如きは寧ろ私の事に属せり 人は必ず相寄りて生活せざる可からずその大なるものを国家と云ひ小なるものを家族といふ新夫妻ありてこゝに新家庭起り新家庭ありて始めて新事業営まる社会は之がために益せられ国家は之がために成立す国家及社会の根本は詮じ来れば実に新夫妻に在り故に社会国家の盛衰消長は実に夫妻の關係如何に基づくものにして夫妻の關係正しからずまた鞏固ならざる時は焉んぞ健全鞏固なる国家を見る事を得んや

社会の極小単位である「家庭」から極大の国家への連続性。「家庭」での道徳教育は国家の枠まで拡大される。その背景には、親子関係を天皇と国民の關係に擬制して重ねられる、いわゆる家族国家観がある。ここでは親への孝が君主への忠という徳目に容易にスライドさせられ、封建的な道徳が近代国家の支配原理を強めていくのである。「家庭」を語ることは、そうした国家との連関性がモチーフとし

て潜在しているといえよう。「家庭」の調和、道徳は忠孝の觀念を経て国家権力に回収されていく。ここで、忠孝を主要テーマとした講談と、家庭小説とが相互に補完しあうという構造が見えてくるだろう。

幽芳の最初の家庭小説「己が罪」の舞台に華族の「家庭」が選ばれるのも、そうした家族国家観に関わりがある。天皇を頂点とするヒエラルキーの上位を占める華族は道徳的にも高位にあると考えられていた。⁽²¹⁾ 道徳を語るのは天皇を代行する華族でなければならぬのである。土着的な古い家族を父の死によって棄却し、新しい道徳的な華族の「家庭」を再生させる「己が罪」は、まさに近代のかつ啓蒙的な物語であつたといえよう。

四、二つの変質

「己が罪」に始まる『大阪毎日新聞』の家庭小説の系譜は中村春雨の「無花果」の登場へと結実する。⁽²²⁾ 第一回の懸賞小説募集の一等となつた「無花果」は、アメリカ人の妻・恵美耶を連れた神学士・鳩宮庸之助が帰国したところから始まる。アメリカ人の嫁にとまどい、冷たくあたる庸之助の家族の仕打ちを堪え忍ぶ恵美耶と、脱獄した昔の恋人・お澤を匿い、罪の意識に苛まれる庸之助とを軸に物語は展開していく。恵美耶は一子・恵太郎を得たことで庸之助の家族から温かく迎えられる。お澤は再び入獄するが自殺、庸之助もお澤を匿った罪で収監され、出獄後、偶然聞いた賛美歌によって再起を誓う。お澤と庸之助の間の子・お巻は恵美耶に引き取られ、恵太郎とともに育てられることになる。

「無花果」は「己が罪」などとともに家庭小説の代表的な作品として挙げられることが多いが、両者は異なつた前提をもつ。その違いとは、「己が罪」が華族を登場させたのに対し、「無花果」には西欧文化、キリスト教が導入されていることだ。キリスト教は、たとえば徳富蘆花の「不如帰」にも登場するが、物語の中心として扱われていなかった。一方、「無花果」ではキリスト教的な倫理観が物語を支えるのである。この場合、恵美耶が体現するキリスト教的な倫理観が庸之助とその家族を道徳的に律していくことになるのである。

このとき、「無花果」は奇妙な二重構造をもつことになる。それは道徳の根源が国家の内部ではなく、外部に求められているからである。「無花果」では封建的な忠孝ではなく、キリスト教的な倫理観による「家庭」の再生が描かれる。だが、そうしたキリスト教的倫理観は、旧来の家庭に接合されることによって、内発的な道徳規準に変換されることになる。恵美耶は家族からの冷遇や夫の裏切りに耐えて家庭を守る。なおかつ、恵太郎という男子をもうけ、さらにお巻という義理の娘を養育する。恵美耶は近代日本の良妻賢母の典型であり、その出自は不問に付される。良妻賢母になることで恵美耶は、日本の「家庭」のなかに初めて場を与えられ、その一員として認められることになるのである。

理想のホームの具象である恵美耶を包摂した近代日本の鳩宮家。西洋的価値基準の優位性とその内面化という二重の構造がここでは示される。それはいわば、近代日本のカリカチュアともいえよう。良妻賢母の感化による「家庭」の再生という物語において、アメリカ人の妻という「無花果」以上の設定を創出するのは困難だ。こうした意味で「無花果」は啓蒙的な家庭小説の着地点を無意識ながらも決定づけてしまったのである。以後しばらく、『大阪毎日』では家庭小説が紙面から消える。幽芳の名は翻案ものの訳述者として現れるだけとなる。²³

家庭小説の再登場は一九〇三(明治三六)年、菊池幽芳の「乳姉妹」であった。²⁴

「家庭小説」という角書きを付されたこの小説は、「無花果」のような啓蒙的な家庭小説の沈黙のあとに登場させられたものであった。華族の娘と自らの出自を偽った君江は自らの虚栄によって死に、謙譲の美德を体現する房江が本当の娘として認められる。善と悪、哀れさと罪とを一身に併せ持っていた「己が罪」の箕輪環の複雑さに比べれば、「乳姉妹」の勧善懲悪の物語は単純すぎる。また、「家庭小説」と銘打たれているものの、「己が罪」のように家庭内での妻としてのあり方を描いた物語ではない。「己の罪」から「乳姉妹」に至る間に、家庭小説は家庭内での父母のあり方を示す物語から女性のあり方にのみ焦点化した物語へと変貌したのである。

鬼頭七美の指摘によれば、「己が罪」も連載当初は多様な読みを可能にするテキストであったという。²⁵ただし、そのテキストの読みを家庭教育というコンテキストによって規定してみると、啓蒙性の高い家庭小説として読むことが要請されたの

だといえる。だが、「乳姉妹」ではすでに家庭教育のコンテキストが後景化してしまっているのではないだろうか。この時期、家庭の言説は女子教育の領域に囲い込まれ、分離されてはじめていた。牟田和恵によれば、総合雑誌から家庭欄が徐々に消えていくのが一九〇〇年代の半ばだといえる。²⁶国家にダイレクトに結びついていたはずの家庭内での役割分担の問題が、私的な空間での問題として限定されて考えられるようになっていく。神聖な恋愛によって結ばれ、営まれる「家庭」という理念が、その私化を促進したともいえるだろう。恋愛という観念が個人という観念に結びつくためである。いわば、「家庭」理念の浸透が家庭を私的空間へとシフトさせたといえるのである。

そうした時代背景が「乳姉妹」の設定にも影響しているのだろう。妻であり、母であることに葛藤し、妻であることに絶望する環に対して、君江と房江は妻になることが到達地点とされている。偽りの人生を歩む君江には死が訪れ、正しく生きる房江には良妻賢母への道が保証されているのだといえる。そこから先の妻、母としての役割はすでに自明のものとして考えられている。夫や子との往還関係は絶たれ、女性の自己同一化の物語が語られるようになっていくのだ。「家庭小説」ということばは、こうした内的な変質を隠蔽するように作用している。あたかも連続しているかのように見せながら、その間の変化は明白だ。このとき、幽芳の家庭小説は後の通俗小説への経路を拓いたともいえる。

その後の幽芳は「夏子(愛と罪)」、「筆子」、「寒潮」などの家庭小説を次々と執筆する。²⁷これらでは女性たちの波乱の人生を描き出される。たとえば、「寒潮」のしがきにはこうある。

この小説中に現はれる人物の多数は、共に現在せる人々で、小説中の事件も、またその大半は赤裸々の事実である。余はこの小説中のヒロインたる二人の女性より、その誠実の告白を聞き、その承諾を得て、こゝに「寒潮」の筆を執らんとするのである。

事実の告白に基づく小説という考え方は、自然主義文学の影響を受けたものだといえる。問題はそうしたモデルに対する同情を作者が要求するという点にある。「諸君の前に表るべき二個の婦人に、多くの同情を寄せられん事を切望する」と幽

芳は書く。実際のところ、「寒潮」では作中に新しく登場してきた別の人物が主に描かれることになる。だが、当初幽芳が期待した同情とは、女性読者による女性読者に対する共感であるはずだ。そうした関係の前提にあるのは女性ジェンダー化された家庭小説の読者像であろう。女性ならばこそ幽芳の描く女性のあり方に共鳴できるはずだという思考がここにはある。幽芳にとつての啓蒙の時代がすでに終わったのである。⁽²⁸⁾

日露戦争（一九〇四―五年）をはさんで、そうした傾向はさらに加速する。一九〇六（明治三九）年三月に掲載が始まった「真澄大尉」は日露戦争時の軍事探偵をテーマにした作品である。そのはしきには次のような一文が見られる。⁽²⁹⁾

今や国民の元氣漸く戦後の経営に奮ひ、婦人社会すら海外に眼を注ぐの時運に際し、此の如き小説は蓋し好箇の読ものたるを信ず

「婦人社会すら」ということは、ジェンダー化された読者の存在を示唆してくれる。恋愛人情の私的領域への封鎖であり、ここではもはや家庭での女性の役割は公的には問題にされない、ということだろう。啓蒙的な「俗受」は、家庭の私的領域への包摂と読者の女性ジェンダー化に伴い、いわゆる「通俗」へと緩やかに変化していく。幽芳は二つの「家庭小説」を架橋したといえるだろう。

五、家庭小説の行方

一九〇八（明治四一）年末、菊池幽芳は欧州に派遣されることが決まる。以後、二年あまり幽芳は『大阪毎日新聞』の紙面から遠ざかることになった。幽芳の後に『大毎』の家庭小説の中心的存在になったのが、田口掬汀だったといえる。一九〇六年、大阪毎日新聞社は東京紙の『電報新聞』を買収して、『毎日電報』を創刊した。これを機に、東西『朝日新聞』、『時事新報』との東西市場での同時展開競争が始まることになる。新聞小説の面で大阪毎日の東京進出を象徴するのが、時代小説の塚原洪柿園と家庭小説の田口掬汀の存在であっただろう。東京紙で活躍した作家を採用することで、東京と大阪の連続性を強く読者に意識させるからである。一九〇八年に大阪毎日新聞社に入社した掬汀は、すでに『万朝報』などで活躍してお

り、家庭小説の書き手としてのキャリアを長年積んでいた。『大毎』にもすでに「新生涯」を発表している。その掬汀が一九〇九（明治四二）年七月一七日付の新聞に載せた「仕合者」の予告がある。

考へさせる小説が必要だと云ふ者がある。成程夫も必要には違ひないが考へねば解らぬものでは読者が迷惑だ。又作家にしても人に迷惑させてまで無理に読ますべき権利はない。人生は苦痛の世界だの悲哀の陳列場だのと云ふけれど、無間断に眉を顰め、年中渋い顔のみして居られるものでない。

ここで掬汀は小説の娯楽性を打ち出した主張を行っている。いわゆる真率なる告白や人生の悲哀などといった自然主義文学への対抗意識が、まずはこの一文から読み取れよう。一九〇〇年代後半に入り、芸術至上主義かつ作家主義的な近代文学の理念が確立されつつあったのに対し、掬汀はそこからの離脱を宣言してみせたのである。裏返していえば、掬汀の離脱宣言は読者本意、非芸術への道標であったのだ。飯田祐子が指摘したように、〈職業〉をめぐる、自然主義による芸術至上主義近代文学の男性ジェンダー化と家庭小説の女性ジェンダー化が推進されたものこの頃だった。ここに読者のジェンダー化の問題も重なってくる。⁽³⁰⁾ 文学理念の芸術至上主義化の傾向が強まってくると、家庭小説の読者を『読めない読者』として差別化しようとする動きがおこってくる。この読者を体现するのが「女性」ということばであった。女性ジェンダー化された家庭小説の読者は隔離の対象となり、家庭小説は日本近代文学の「圏外」へと自閉していくことになるのである。

また逆に、女子教育の場でも、小説の悪影響への懸念が拡大していきつつある時期でもあった。ことに一九〇三（明治三六）年の藤村操の自殺以来、西欧由来の芸術的な文学の悪しき影響が説かれ、教育と文学の隔離が行われていく。たとえば、『家庭文芸』の発刊に伴って、加藤弘之は「昨今女学生の墮落などと云ふ声を耳にするが、これなども、重なる原因の一つは此悪文学の悪影響と云ふことに存するものと考へる」という。「今日の女学生などの間に見える悪傾向は身を持崩す、不品行なことをする、是が一つ。今一つは無暗矢鱈に世を果敢なむ、世の中が厭になつたと云つて華嚴の瀧などへ出掛けて行く、どちらにしてもよくない、憂ふべき現象である」。こうした意見は当時の「良識ある知識人」の共通認識だったであろう。

芸術至上主義文学の男性ジェンダー化は、女子教育側からの隔離によっても進行していったようだ。

文学者から引かれた境界線は家庭小説を女子教育の側へと追いやる。家庭小説は物語の型としての勧善懲悪と道徳性を残存させた娯楽として自らの無垢をアピールするわけである。だが、それはけつして良妻賢母のコードが失効したことを意味するものではない。むしろ、良妻賢母のコードは娯楽の陰に隠蔽され、物語のなかに包括されたのだといえる。

同時に、掬汀のことは新聞メディア間の競争原理も作用している。東西の『朝日新聞』が夏目漱石というインテリ作家を採用したのに対する対抗意識を、田口掬汀のことは看取することもできないだろうか。「仕合者」の予告が掲載された一九〇九年七月一七日の東西『朝日新聞』には漱石の「それから」が掲載されていた。大学を卒業しながら何をするとなく日々を暮らしている、いわゆる高等遊民の物語を、掬汀がどのように受け止めていたのかは定かではない。だが、「虞美人草」において家庭小説の物語性を否定した漱石の作品は、女性読者には『読めない』小説であったことは間違いないだろう。掬汀はその逆を衝く。掬汀のマニフェストは、そうした文学作品から排除され、自閉する読者へ向けられているのだ。家庭小説の日本近代文学からの逸脱の歴史は、その読者とともに近代をたどることもある。その道のりはまだまだ長い。

注

- (1) 「家庭小説の展開」『明治文学全集93 明治家庭小説』筑摩書房、一九七二
- (2) 『彼らの物語——ジェンダーと日本近代文学』(名古屋大学出版会、一九九八)
- (3) 金子明雄「『家庭小説』と読むことの帝国——『己が罪』という問題領域」『メディア・表象・イデオロギ——明治三十年代の文化研究』(小沢書店、一九九七)
- (4) 「硯友社側面史 纏まらぬ記憶」『早稲田文学』一九二六・一。引用は『明治文学回想集(下)』(岩波文庫、一九九九)による。
- (5) 『大阪毎日新聞』一八九九年四月二日の文学欄では、『よしあし草』神戸支部での水蔭崇拜を批判する記事がある。
- (6) 「文学欄を設くるの辞(上)」『大阪毎日新聞』一八九九年一月一五日
- (7) 『乳姉妹』(春陽堂、一九〇四)

- (8) 「天下茶屋の(父)——家庭小説『己が罪』と明治期大阪の文学力——」『文学』二〇〇〇年九、一〇月号
- (9) 「作家歴訪録(其三)」『よしあし草』一八九八年一月号
- (10) 「文学的趣味」は無署名だが、「吾輩が本紙の一隅を割いて文学欄を起こしたるも」という一文から幽芳の手になる文章だと判断できる。
- (11) 『大阪毎日新聞』一八九二年二月二六日、四月二日
- (12) 「光子の秘密」一八九二年二月二六日、四月二日、「新聞売子」一八九七年一月一日、三月二五日、「国事探偵」一八九八年一月一日、三月二日、「深山雪枝」同年三月一日、五月二〇日、「七日間」同年一〇月一日、一八九九年一月一五日
- (13) この点は多く誤解されている。たとえば、兵藤裕己(『声』の国民国家・日本)日本放送出版協会、二〇〇〇)は『大阪毎日新聞』は、明治三〇年代に、当時の新聞としてはいちやく紙面から講談速記物を廃し、趣味のよい家庭の読み物として新聞連載小説(いわゆる家庭小説)を掲載した」と記すが、本論で述べたように講談速記と家庭小説は並行して連載されていた。
- (14) 綿谷雪編『幕末明治実録』(青蛙房、一九七二)
- (15) 藤田省三『天皇制国家の支配原理』(未來社、一九七四、第二版)
- (16) 神田伯山「徳川天一坊」一八九七年一月八日、九八年二月二日、西尾魯山「相馬大作」一八九八年七月一四日、一二月一三日、柴田薫「慶安太平記」同年一二月一四日、九九年三月二〇日、桃川燕林「越後騒動」一九〇一年四月一三日、八月一四日、桃川小燕林「黒田騒動」同年一月六日、〇二年三月六日、桃川燕林「宇都宮釣天井」一九〇二年三月七日、五月二四日、小金井馬琴「伊達評定」一九〇三年九月四日、一二月一二日、桃川燕林「加賀騒動」一九〇六年三月一五日、七月八日、真龍齋貞水「仙石騒動」一九一〇年一月二六日、七月三日、真龍齋貞水「桜田騒動」一九一一年一月一日、七月一日、真龍齋貞水「天草騒動」一九二二年一月一日、五月二二日
- (17) 「作家歴訪録(其二)」『よしあし草』一八九七年九月
- (18) 兵藤裕己(『声』の国民国家・日本)『日本放送出版協会、二〇〇〇』
- (19) 「離縁と新民法」(一)『大阪毎日新聞』一八九八年八月二二日
- (20) 牟田和恵「戦略としての家族 近代日本の国民国家形成と女性」(新曜社、一九九六)
- (21) 川島武宜「イデオロギとしての家族制度」(岩波書店、一九九七)
- (22) 「無花果」一九〇一年三月二八日、六月一日
- (23) この時期の幽芳の作品は、『白衣の婦人』一九〇一年七月一四日、九月一七日、「宝庫探險秘中の秘」一九〇二年一月三日、〇三年三月二八日などである。
- (24) 「乳姉妹」一九〇三年八月二四日、一二月二六日
- (25) 「紙面の中の『己が罪』」『日本近代文学』二〇〇六年五月
- (26) 「戦略としての家族 近代日本の国民国家形成と女性」(新曜社、一九九六)

- (27) 「夏子」一九〇五年六月九日～一月五日、「筆子」一九〇六年六月一日～十二月一日、
 「寒潮」一九〇八年一月一日～四月二日
- (28) 「寒潮」最終回で五百子という女性が新聞記者としてスカウトされる場面がある。そこで示される仕事内容は、西洋夫人の訪問、紳士の婦人訪問、家庭記事など「女の領分に
 関する仕事」である。この場面では、もはや家庭という領域は私的なものとして自明化
 され、女性の社会的役割が公的な労働によって規定されているといえる。
- (29) 「真澄大尉」一九〇六年三月一日～五月二六日
- (30) 『彼らの物語——ジェンダーと日本近代文学』（名古屋大学出版会、一九九八）

The mutation of the Home Novels

MOROOKA Tomonori

Abstract : The Home Novels began to be written at about 1900's. They were about the idealized home and conjugal life.

Now, these works are ruled out from the Modern Japanese Literature history and aren't recognized as works of art because they were written for moral education and positioned as the popular novels.

I want to broaden our horizons by reconsidering the Home Novels and criticize the authoritative power of culture and literature.

So, I pick up Kikuchi Yuhou. In the 1900's, Kikuchi Yuhou was one of the most famous writers of the Home Novels. He was a journalist of the Osaka Mainichi Shinbun newspaper company and wrote many newspaper novels.

In my paper, I focus my attention on Kikuchi Yuhou and the Osaka Mainichi Shinbun newspaper for which he and the other writers wrote the Home Novels.

I deliberate about transition of the Home Novels with relation to the works of Koudan storytelling and the context of the education and social events in the 1900's.